

暑  
さ

夏の日の午後。むし暑さを含んだ空気は、少しの風さえも起こそうとせず、じっと立ちどまつたままだった。物かげの犬は、だらしなく寝ころんだまま動こうともせず、街角にある大きな桐の木も、一枚の葉さえゆらさなかった。そして、その木の下にある交番のなかでも、巡査が小さな机にむかっていたまま、なにか書類に目をやっていたが、この暑さはその内容を彼の頭には入れさせはしない。

どこからともなく、おとなしそうな若い男があらわれ、交番の前に立った。暑い空気がうみ出したようにも見えた。その男は交番のなかにむかって、声をかけた。

「あのう、わたしをつかまえていただくわけには、いかないものでしょうか」  
巡査はゆっくりとふりむいた。

「え。なんですって。まあ、その椅子にかけて話したまえ」

と、そばの古ぼけた椅子を指さした。

「はあ。わたしの話を聞いていただけでしょうか。そして、わたしをつかまえてはいただけませんか」

「ははあ、自首ですか。お話によっては、本署に来ていただくことにもなるでしょう。ところで、

なにをなさったのです」

と、巡査は少し身構えるような様子になった。

「いえ、まだ、なにもしておりません」

「では、だれかをおどすようにたのまれたとか、傷つけるようひとにたのんだとでも」

「いえ、わたしの言いたいのは、そんなことではありません。いまにも自分がなにかをしそうなのです」

巡査は汗をふき、首をかしげ、それから目と口もとに独特な笑いをうかべた。

「ああ、そうですね。こう暑くては無理ありません。自分が、なにかとんでもないことをはじめるように感じるのでしょうか。時どき、そんな訴えがありますが、その心配はありませんよ。帰って昼寝でもなさればなおりましょう。それに、われわれとしては事件がおこらないうちは、どうしようもないのです。いかに、殺してやる、と叫んでいる者があっても、その動きがないうちは逮捕しようがありません」

若い男は、汗をふこうともせず、こうぼつりと言った。

「ちょうど一年前の、こんな暑い日。わたしは殺したんです」

巡査はこれを聞いて緊張イオンチヤウした。

「え。なぜそれを早く言わない。だれを殺したんだ」

「サルです。わたしの飼っていたサルを」

と、男が答え、巡査は緊張をといた。

「きみ、自分の飼っていたサルを殺したって、べつに自首するには及ばないんだよ。しかも、一年前の話を、なんで今ごろ持ちこむんだね。そういう訴えなら、この先の右側に神経科の病院があるから、そっちへいってもらいたいね」

「わたしの頭がおかしい、とお考えなのでしょうね。だが、今までに何回か診てもらいました。そして、少しもおかしい所はないと言われているのです」

「なにも事件をおこさず、頭もおかしくない。そんな人を逮捕することはできないのですよ。なにも憲法や法律を持ちださなくても、常識でわかることでしょ」

「それは知っています。だけど、わたしの話をひと通り聞いていただけでしょうか」

「いまはいそがしいわけでもないから、話して気が晴れるならそこで話してもいい。だが、話は簡単にして、二度とこないでほしいものだね」

「ありがとうございます。わたしは子供の頃から暑いのがいやなんです。暑いと頭がぼんやりして、それでいて、とてもいらいらしくるので」

「それでもそうだろう。暑さで頭が冴えてくる者など、聞いたことがない」

「わたしの場合は、特にそれがひどいようです。なにかをしなければならぬ、という衝動が強くなり、それを無理におさえようとすると、頭が狂いそうになるのです」

「それでもそうだろう。そこで、スポーツや読書など、自分に適当なものに、はけ口を見つけてわけだよ」

「わたしも、そのはけ口を持っています。そのはけ口があるから、頭が狂わないですんでいるの

です」

「それならいいじゃないか。なにも、交番にまで来て大さわぎしなくても。さあ……」

と、巡査は手をふったが、男は、

「もう少しですから。まあ、聞くだけ」

と、すがるように言つて、話をつづけた。

「子供のころ、そのはげ口を見つけた時のことです。高まる暑さにどうしようもなかった時、ふと畳の上をはっているアリをみつけ、つぶしてみたのです。すると、それまでのいらいらが嘘のように消えて、その夏はそれからすがすがしい気分ですごせました」

「いい趣味じゃないか。ひとに迷惑がかかるわけでも……」

巡査の語尾は、あくびとまざった。

「つぎのとし、やはり夏の暑さが高まってきた、いらいらが強くなりました。そこで、前のとしのことを思い出し、アリをつぶしてみたのです」

「ふうん」

「だが、だめでした。困った、どうしたらいいか、と、ジリジリした絶頂でその解決が偶然に見つかりました。なんだったと思います」

「ふうん」

巡査は目を閉じて、返事にならないあいづちをつづけたが、男はおかまいなしに話をつづけた。カナンをつぶしたのです。その夏は、それからずっと、すがすがしい気分でした。そして、

その次の夏。少しこつがわかってきたので、近所の子からカブトムシをもらい、それをつぶすことよって、いらいらを押えることができました」

「ふうん」

「こうして、わたしの頭は狂うことがなく、今までできています。おとしの夏は犬を殺しました。その頃になると、すっかりなれてきて、次の年の準備をすぐにはじめるようになっていました。秋になると、さっそくサルを飼ったのです。サルも飼ってみると案外かわいいですよ」

「ふうん」

と、目をつぶった巡査は椅子にかけたまま、上半身ぜんたいで、うなずいた。

「とても殺す気にはなるまいと思いましたが、だが、昨年暑さが高まるにつれ、いらいらを押えることはできませんでした。わたしはサルをしめ殺してしまっただけです」

男の声は大きくなり、巡査は目を開いて、あわてて汗をぬぐった。

「え、サルを殺した話はさっき聞いたことじゃないか」

「わたしを逮捕して下さい」

「そう無理を言っては困る。さっき言ったように、きみは、なにも事件をおこしていない。それに、昆虫採集こんちゆうのようなことにはけ口を見つけて、頭も狂わず、正常だ。そんな人を、逮捕したり、収容したりすることはできないよ」

「そうですか。では、仕方ない。帰りましたよ。おじゃましました」

「ああ、そうしなさい。ゆっくり昼寝でもするんだね。夜になるとむし暑くなって、寝られない

から」

「そうですね」

と、立ちあがった男に、巡査はなにげなく聞いた。

「家族はあるんだろう」

「ええ、昨年の秋に結婚して……」